
オネアミスの翼
王立宇宙軍

部屋においで

胸が熱くなる。心に響く。
想い出に残る……その美しいシーンの
すべてをあなたへ——

設定資料、ポスターなど、内容も豊富なオールカラーのフォトストーリーブック。小学館より2冊同時発売!!



ザ・セレクト
定価1,000円 A4判

臨場感あふれるA4サイズで感動を胸いっぱいに。オールカラーのフォトストーリーに、キャラクター&ビジュアル設定資料集、スタッフインタビューのほか、貞本義行氏による描き下ろしポスターまで付けて、あなたの心を離さない。

好評発売中

小学館文庫
アニメ・ノベルズ
定価520円 A6判

ポケットの中に入る〝感動〟。A6サイズ・全80ページにわたって、スペクタクルロマンのすべてを再現。しかも大野木寛氏によるシナリオ準備稿付きだから映画との比較もバッチリできちゃう。見て、読んで、2倍楽しめる一冊。



一緒にいたい。

小学館



株式会社バンダイ
代表取締役社長
山科　誠

製作のことば

夢・クリエイション

私共、株式会社バンダイはこのスローガンのもと総合エンターテイメント企業を目ざし、様々な分野への挑戦を続けております。

そしてこの度、私共の映像事業の一環として自社製作いたしました、初の長編劇場映画が完成し、いよいよ皆様におとどけできることとなりました。それがこの「オネアミスの翼　王立宇宙軍　」です。

この作品の製作にあたっては、現代の若者たちはもちろん、幅広い年齢層の方々の、映画というジャンルに対するニーズに応えるべく、様々な検討を重ねてきました。そして、その準備に約2年、そして実製作にさらに2年をかけて作り上げた大作です。

映像の製作には、時代を先取りする優れた感性の持ち主である弱冠24歳の山賀博之監督を中心に、若手クリエーター集団GAINAXの俊英スタッフがあたりました。

また、彼ら才能あふれる若手を中心として画期的映像を生み出そうという試みに、賛同の意を強くしたマルチメディアの旗手、坂本龍一も音楽監督として、大いにその手腕を発揮してくれました。

こうした若き才能と情熱を結集した「オネアミスの翼」は、まさに映画界においてエポックメイキングな作品であり、なおかつ大勢の方々に楽しんでいただける本格的エンターテイメントであると自負するところです。

誠実さとユーモアあふれる映像を通じて、若者の青春像を深い感動と共におとどけする「オネアミスの翼」をどうぞじっくりとお楽しみ下さい。

EXPLANATION



構想5年、製作3年、巨費8億円を投入。アニメーション史上空前のスケールを持つビッグプロジェクトがついに完成した！

それがこの「オアネミスの翼―王立宇宙軍―」である。時代を先取りする若い感性が、まったく新しい感動と驚きを秘めた、オリジナル長編作品を生み出した。

物語の舞台となるのは、我々とは異なる異世界。その世界に存在する、落ちこぼれの軍隊“王立宇宙軍”に所属する主人公シロツグ=ラーダット。ぐーたらな毎日を送っていた彼が、少女リイクニとの出会いをきっかけに、その世界初の宇宙飛行士へと志願してしまう。そして、その過程において、シロツグは多くの人々と出会いながら、悩み、迷い、成長していく様を見せていく。この作品は、そんなシロツグの精神的成長の姿を縦軸として描きながら、異世界、また、そこでの宇宙開発へのプロセス、そしてラストの宇宙船をめぐってくりひろげられる攻防戦というスペクタクルが、からみ合って織り成す、一大ページェントだ。

この大作の監督を務めるのは、「DAICONⅣオープニングアニメ」などのアマチュア作品によって、多くのアニメマニアに人気を誇る山賀博之。商業作品は今回が初めてであり、弱冠24歳にして監督としてデビュー。この作品の原案も自身によるオリジナルである。キャラクターデザイン・作画監督には、漫画家としても知られ、その新鮮なキャラクターで人気の高い、貞本義行。さらに、庵野秀明、飯田史雄、森山雄治といった実力派メンバーも加っている。美術監督に小倉宏昌。撮影監督に諌川弘。撮影スーパーアドバイザーに八巻磐。音楽監督に田代敦巳。といった、有名無名を問わない実力派スタッフが、この作品のために結集した。

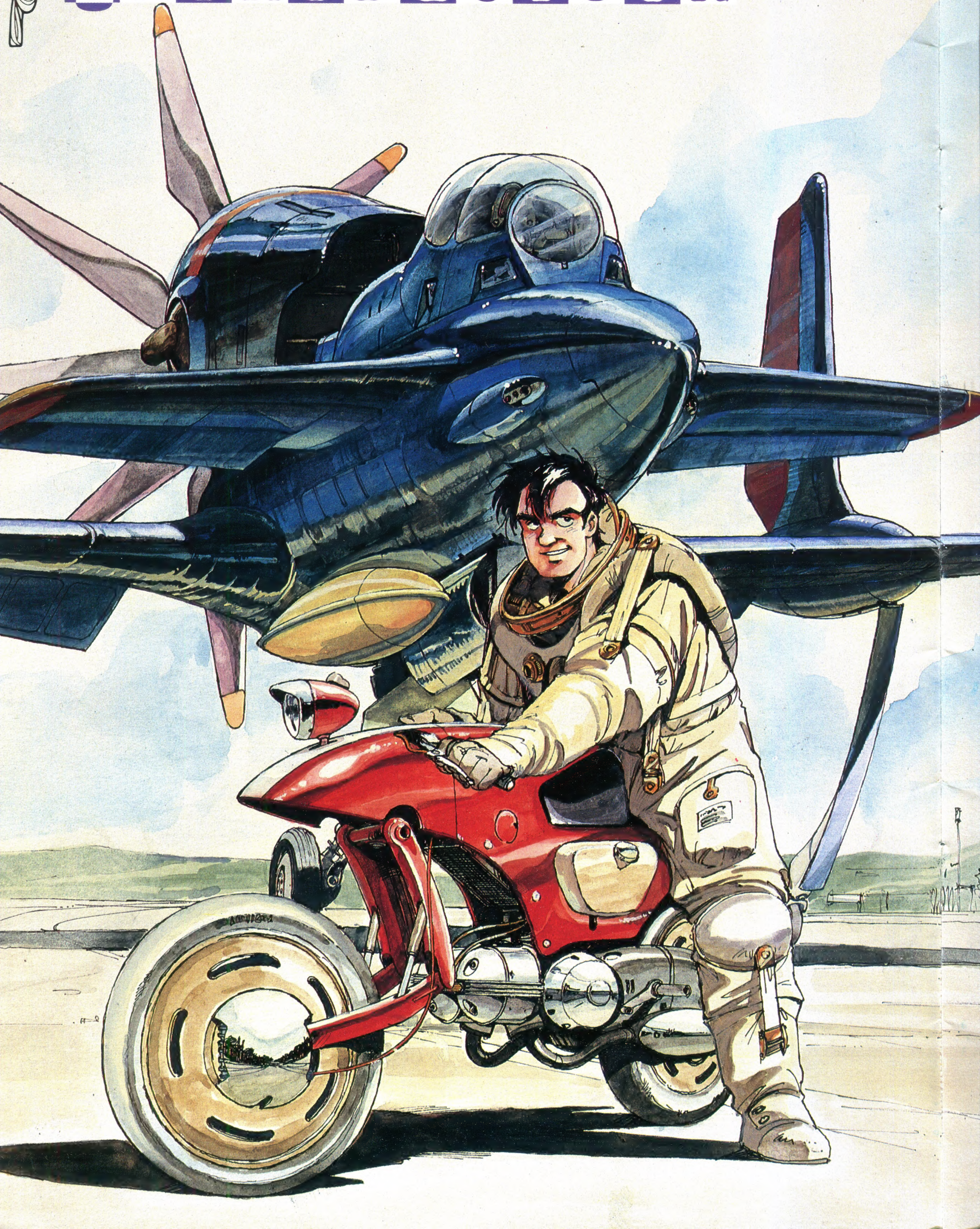
音楽監督には、元YMOであり現在は「音楽図鑑」「未来派野郎」などのソロ活動や、「戦場のメリークリスマス」への出演で知られるマルチメディアの旗手・坂本龍一。そして、元「ゲルニカ」の上野耕治、「おしゃれテレビ」の野見祐二、「パール兄弟」の窪田晴男が、共同アレンジャーという形でこの作品の音楽制作に参加している。

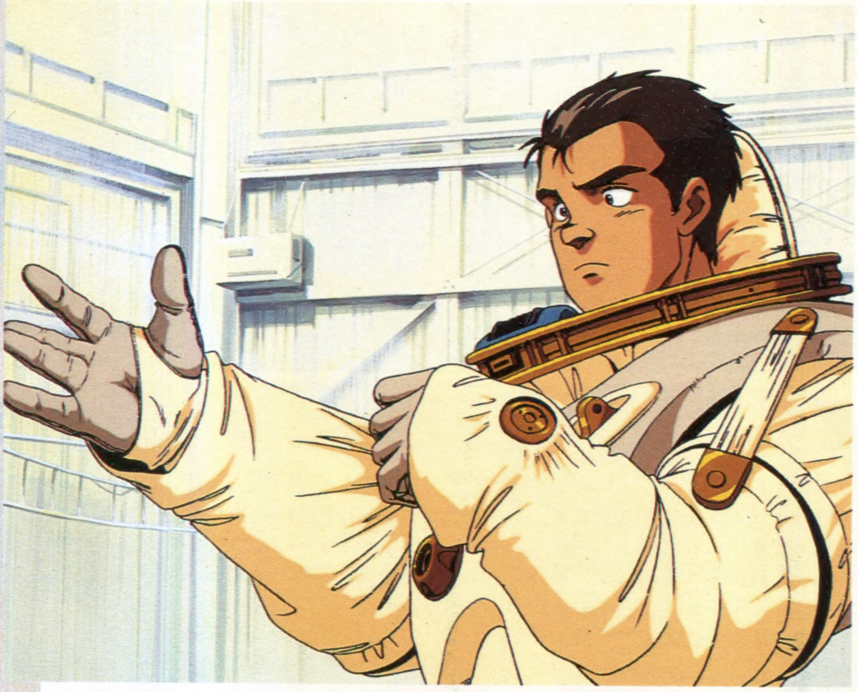
これらのスタッフによって作り上げられた本作品は、まさにいま日本でも最高にクリエイティブな感覚の集合による、新世界の映像と言えるであろう。





INTRODUCTION



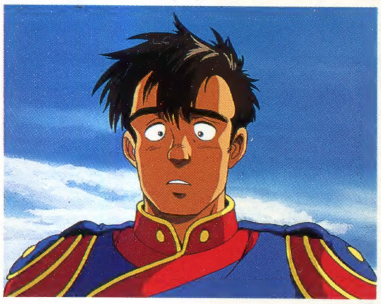


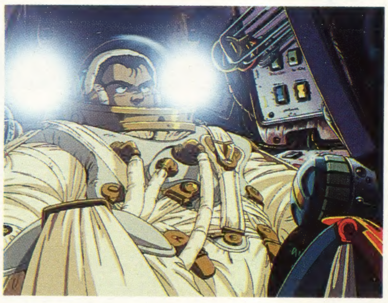
シロツグ=ラーダット

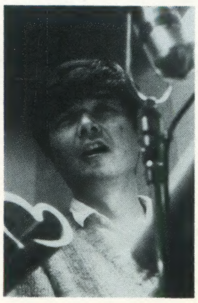
王立宇宙軍中佐。身長171cm、体重62kg。宇宙軍第2期生。ピツボウ湖畔の町の中流家庭で平凡に生まれ育った。幼少の頃はピツボウ湖まで水軍のジェット戦闘機を見に行くぐらいパイロットに憧れていたが、その為の努力はしていない。不本意ながら入隊した宇宙軍で漫然とした生活を送っている。多少は将来に不安を感じているらしい。遊廓で見かけたリイクニが気になり、興味の無い宗教の話をする為にリイクニの家を訪ねる。2人で話をするうちにリイクニのテンポにノセられて、ついに初の宇宙船パイロットに志願してしまう。パイロットとして有名になるが、グノォム博士の事故死、宇宙軍の運営金についての疑問、社会に対する不満、政府の陰謀等多くのことに直面させられて次第に成長し、ついに共和国との戦闘の中でロケットの打上を敢行する。

「俺はやめないぞ。ここでやめたら俺たちは何だ。ただのバカじゃないか!!」

●声の出演……………………**森本 レオ**





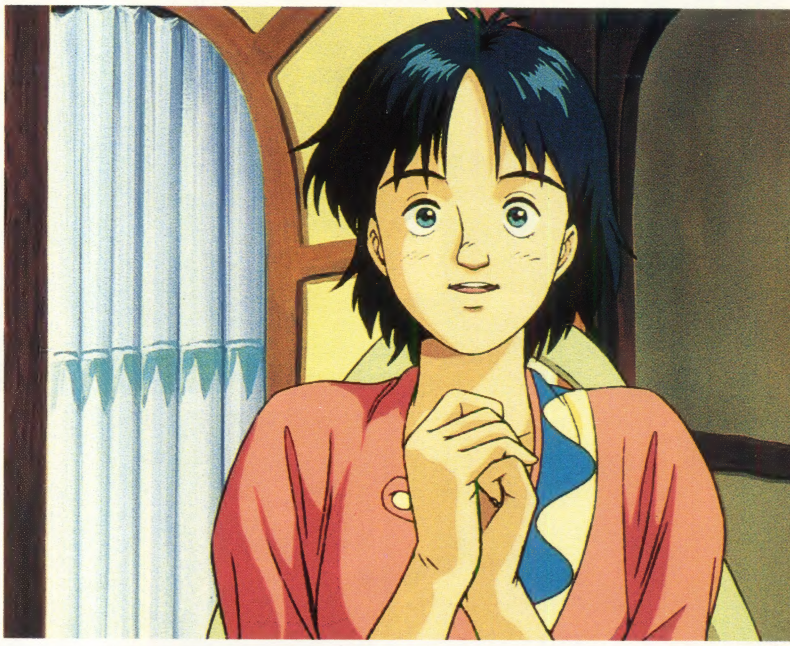


僕はアニメのアフレコ、っていうのは精神的には初めてなんです。

シロツグは立派な英雄ではないのでホッとしています。ウケを狙わずになるべく素直にやりました。

こういう個人の成長の果てに壮大なものが見えてくるドラマを若いスタッフが創ってくれたこと、その作品に参加できたことがとても嬉しいです。　(談)

リイクニ=ノンデライコ



両親が不仲だったために外国系である祖母に育てられた3世である。その祖母が熱心に信仰していた宗教の影響で、世間一般の人々とは少し異なった倫理観を持っている。自身もその宗教の熱心な信者であり、遊廓や繁華街など不浄な場所を選んで、その土地に住む人々を救うために布教活動を行なう。シロツグから宇宙軍の話を聞いて最初は感動するが、宗教ではなくリイクニ自身を目的とするシロツグの不純さに怒ったりもする。17才。身長165cm、体重52kg。B78cmW61cmH88cm。

「すばらしいわ。戦争をしない軍隊さんがいたなんて」

「あなたの言うテキトウな折り合いが世の中をこんな風にしたのよ」

「ごめんなさい、わたしどうかしてたんです。あなたのような立派な方をなぐってしまうなんて」

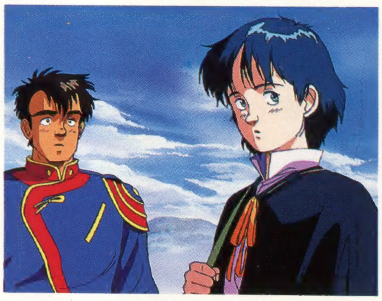
「いいえ、あなたが許して下さるのはわかっています…でもわたしにとっては許されないことです」

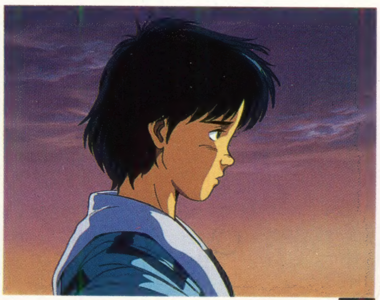
●声の出演…………………**弥生 みつき**



アフレコは初めてなんです。だから好奇心が強いですね。

リイクニは、この子の場合宗教というものをとてもかたくなに信じていて、だから自分の感情のままに言葉を発するのではなく、口にする時には淡々と言うんです。そういう気持ちは、現代の私達の世代と共通する部分があるのでよくわかるな、と思います。　(談)







マナ

飲み屋の主人夫婦が娘のマナを奪い合うような喧嘩をしていたため、そこの洗い場で働いていたリイクニが無理矢理に連れ出して養っている。感情を人に伝える術を知らず、人見知りが激しい。リイクニが目的で、足しげく家に訪ねてくるシロツグには徐々に慣れていく。マナという名が本名かどうかは怪しい。5才。身長108cm、体重22kg。唯一無二の台詞は「お星さま」である。





指導官

学位や特別な資格を持っているわけでない叩き上げ軍人の典型。その役職も便宜上であり、宇宙軍の組織基盤のもろいところである。異常なまでに厳しい訓練を行なうが、内情は部下思いの人間である。仇名は"脳味噌筋肉"。41才。身長185cm、体重70kg。

カンデン=ル=マシーレ将軍

宇宙軍司令官。宇宙軍の創設者であり最高責任者。大学時代に考古学を学び歴史学者になろうとしたが、故郷の町が戦火に襲われたのをきっかけに陸軍に入隊。人間の愚かさと現実の苦しさを知ることになる。その後に宇宙軍を創設、将軍として有人衛星(宇宙戦艦)打上計画に挑む。王室内部にも通じる政治的手腕を活用して、失敗の続く宇宙軍を存続させようとする。53才。身長166cm、体重59kg。



宇宙軍のメンバー

マティ

宇宙軍中佐。シロツグの親友で常に行動を共にしている。頭の回転が速く、非常に要領がいい。その反面で保守的な面もみせる。カーマニアで、休日は欠かさず中古車屋を覗いたり、愛車のバイクをいじっている。21才。身長176cm、体重68kg。宇宙軍第2期生。

カロック

宇宙軍中佐。普段は物事を冷静、確実に判断、行動するが、一度怒ると誰にも止められない。自論を貫ぬこうとする態度は時々に対人関係を悪くすることもある。実家が大工のためか、手先が器用である。23才。身長183cm、体重70kg。宇宙軍第3期生。

ダリガン

宇宙軍中佐。宇宙軍一の秀才で、衛星軌道の計算などを一手に引き受ける。趣味でSF小説を執筆、雑誌に投稿しているが、掲載された雑誌が必らず休刊や廃刊になるので"雑誌つぶし"の異名を持つ。25才。身長167cm、体重60kg。宇宙軍第3期生。

ネッカラウト

宇宙軍少佐。実家は伝統芸能の家元で、厳格な家庭環境に生まれ育った。その反動か、非常に新しい物好きで、時事問題も詳しい。その個性的性格のため特異視されるが、本人は人目は気にしていない。20才。身長173cm、体重65kg。宇宙軍第3期生。

















チャリチャンミ

宇宙軍少佐。交友もなく、宇宙軍の中でひとり孤立している。風呂に入らないなど、不潔な理由もあるが、言動が他人を不快にさせてしまう損な性格である。いつも愛猫と戯れている。地元の消防団に属していて、週一度は帰省する。20才。身長160cm、体重65kg。宇宙軍第3期生。

ドムロッド

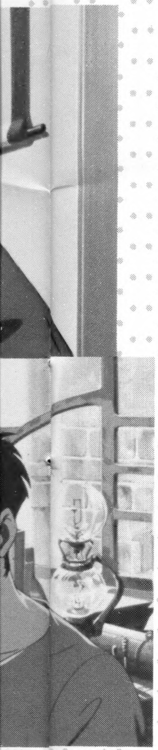
宇宙軍中佐。実家が荘園を持つ地方豪族の名家のためプライドが高く、宇宙軍に属していることに大きな不満を抱いている。自分のことは関係なく、他人の無責任さを嫌う"宇宙軍一の無責任男"。21才。身長170cm、体重58kg。最後に残った唯一人の宇宙軍第1期生。

ヤナラン

宇宙軍少佐。中小企業の会社々長子息として生まれ育ったため、その巨体に似合わないおっとりした性格の持ち主である。根本的な物欲は薄いが、他人が自慢する物を何でも欲しがる幼稚な面がある。20才。身長190cm、体重105kg。宇宙軍第3期生。

マジャホ

宇宙軍少佐。外見が老けてみえるため、子供がいるという噂がある。様々な情報に精通していて、有人衛星（宇宙戦艦）打上計画の中で最も醒めて状況を見ている。19才。身長152cm、体重52kg。宇宙軍第3期生。



グノォム博士

宇宙旅行協会のリーダーで、ロケットのノズル造りの棟梁である。また、世界各地を旅する冒険家でもある。頑固で偏屈、でも気は若い。自分の造った部品に名前をつける習慣がある。エンジンの燃焼実験の際に、シロツグを残してひとりだけ逃げだし、そして何故かひとりだけ死んでしまった。著書に「ベンク族の性風習」「すべての道は西へ向う」などがある。51才。





宇宙旅行協会のメンバー

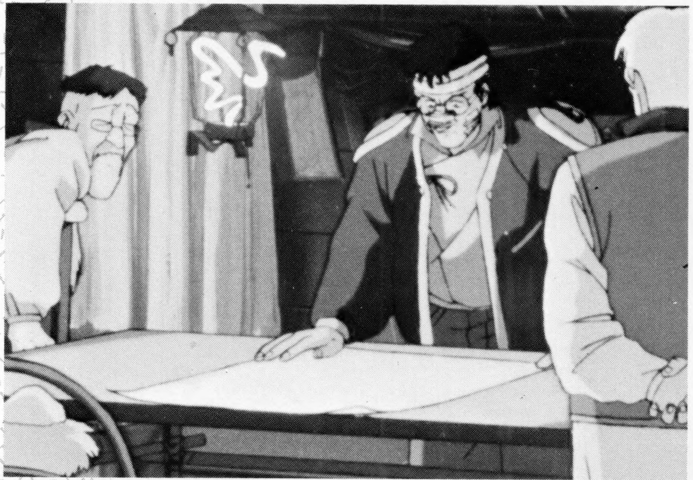
宇宙軍と同時期の20～30年前に、やはり同理由の30年前に発表されたキイン＝レイ＝ケラスの名著書「銀河旅行は可能である」に刺激されて設立した、宇宙旅行をするための非公認団体。構成メンバーはグノォム、ロンタ、デフロ、その他名の無い5人は便宜上老人Ⓓ、Ⓔ、Ⓕ、Ⓖ、Ⓗと呼ばれている。ロンタは気が弱い割に口数が多く、デフロもまたよくしゃべる。Ⓓは「言えてる」とか「ふん」とか一言二言しか口にしないがそれによって自分の存在を主張している。Ⓔは生きているのか死んでいるのかよくわからない。Ⓕはにこにこしている割にしゃべらない。ⒼとⒽは資料不足により不明。



ネレッドン 共和国政務次官

過去に幾度かの大戦を経験しているが現在は国境付近の緊張程度でおちついている王国と共和国。だが、王国が「宇宙戦艦」の打上げを公式発表したため、制空権の危機を感じた共和国は政務次官であるネレッドンをヘッドに、国境付近で打上げられるロケットの打上阻止及び争奪計画を発動する。







殺し屋

王国の有人宇宙船打上計画を阻止するために、共和国はシロツグを暗殺してしまおうと試みる。そこで最初に王国に送りこまれた殺し屋は老婆に扮し、周囲に警戒心を起こさせないようにして市場に潜入し、シロツグを狙った。









STORY

轟音をとどろかせながら上昇していく水軍のジェット機。その姿を飽くことなく見つめる一人の少年の姿があった。少年の名はシロツグ＝ラーダット。幼い日の彼にとって、水軍のジェットで高く、速く、飛ぶことはなによりも素晴らしく思えた。そして、それは彼の生涯の目標であった。だが、現実は違った。軍のエリートである水軍に入隊するには、シロツグの成績は充分とはいえず、彼は志願先を変更せざるを得なかった。そうして、彼は王立宇宙軍へ入隊した……。

だが、30年の歴史を誇る宇宙軍も、その栄光も名ばかりで、実体は惨憺たるものであった。そこが人間を打ち上げるどころか、人工衛星すら満足に上げられない、おちこぼれの集まりであるということを知るころには、シロツグも自分の夢を忘れかけていた。

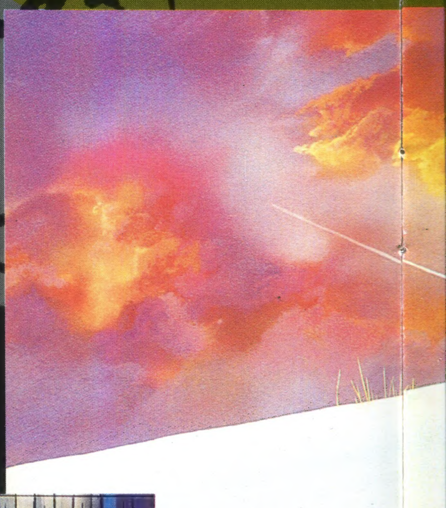
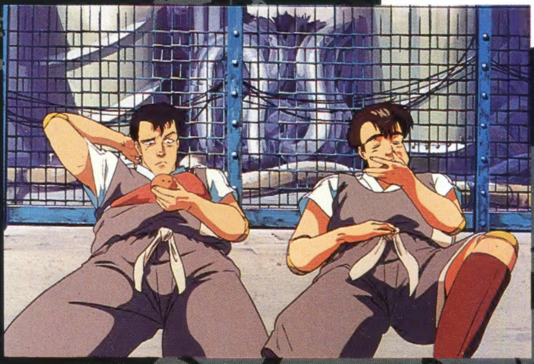
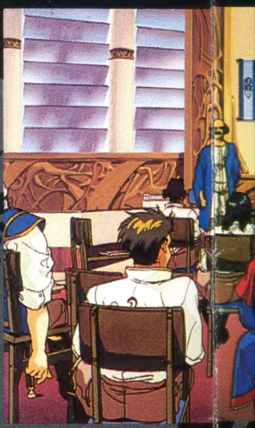
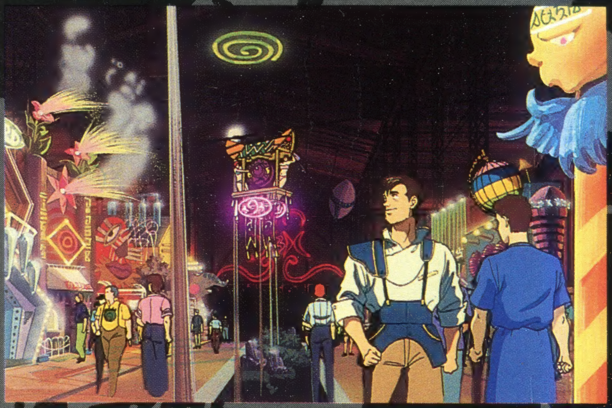
毎日の訓練ですら真面目にやろうなどと考えている者はいない。訓練をサボリながらシロツグは、親友のマティに宇宙軍をやめようかと悩んでいることを話す。しかし、マティはそんな気は無いと一笑に伏すのだった。外の環境を知っているマティたちにとって、宇宙軍はこのうえなく居心地の良い場所であって、そんな所を離れようなどとは考えてもいないのだ。だが、シロツグはこんな生殺しのような生活が続くのにもうんざりしていた。

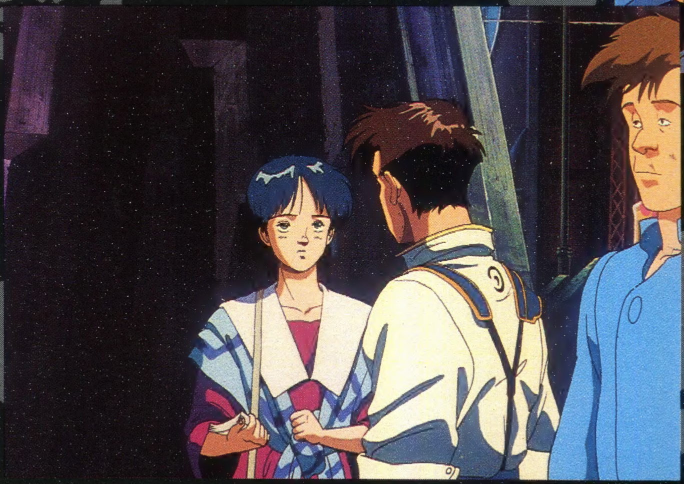
いつものように訓練を終えて酒場へと出かけたシロツグたちは、そのいきおいをかって遊廓へと出かける。そこでシロツグは、神の教えを説いているおかしな少女に出会う。その少女の容貌に気をとられたシロツグは、少女の配るビラをなんとはなしに受け取ってしまうのだった。

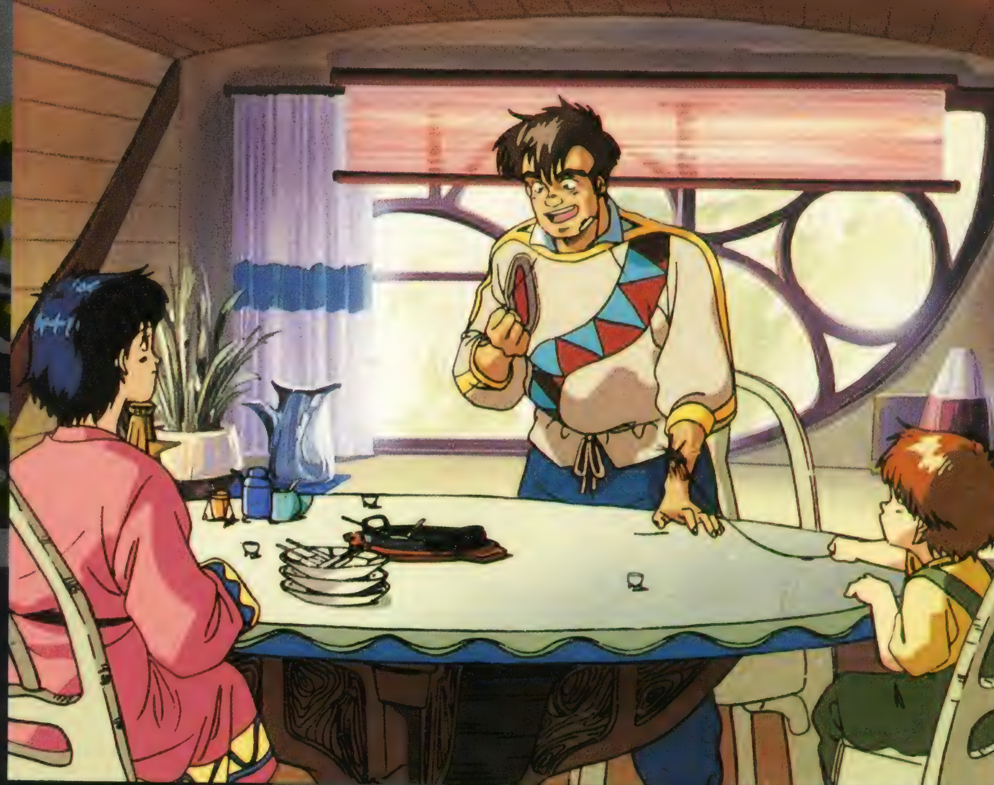
翌日、下心も手伝って、シロツグはビラに書かれた住所をたよりに、少女の家をたずねた。少女の名はリイクニ＝ノンデライコといい、マナという名の幼い女の子と暮していた。めったにおとずれることの無い客に、感激したリイクニはシロツグを手厚く迎える。とりとめの無い会話の中で、シロツグは自分が宇宙飛行士であることを話すのだった。戦わず、宇宙へ行くことだけを目的とした、宇宙軍の存在に感激したリイクニはシロツグを大いに励ます。シロツグもリイクニの言葉を聞くうちに、しだいに自信をとりもどしていくのだった。

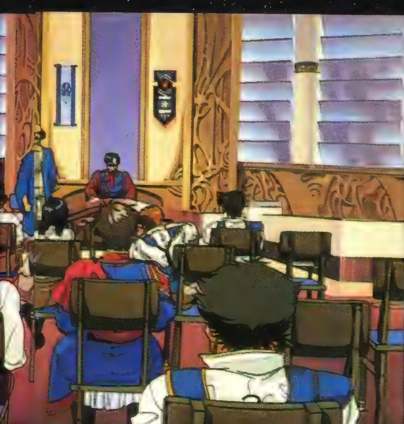
一方、宇宙軍では取り潰しのうわさが流れる中、それを打ち消す最後の手段として有人衛星の打ち上げを計画する。パイロットは志

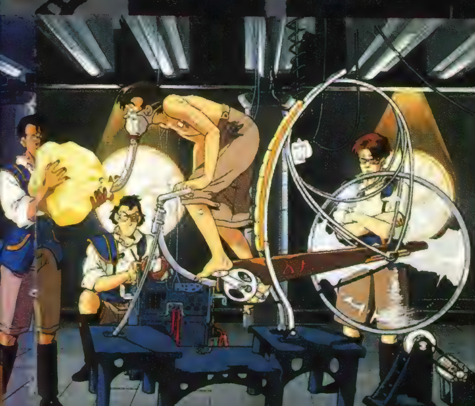













STORY

願で選ばれることになった。誰も志願するはずのないこの計画に、リイクニとの会話で浮かれていたシロツグが志願してしまう。必死になって止めるマティたちの言葉も、いまのシロツグには届くわけもなかった。

かくして、シロツグの訓練を始めとして、有人宇宙飛行計画は発動した。もともと、たいして努力をしていなかったシロツグであったから、成績のほうも順調に上っていた。

また、打ち上げに使用されるロケットの製作も、宇宙旅行協会なる老人たちの手によって進められていた。この奇妙な老人たちの集団にシロツグたちは不安を抱くが、中心人物であるグノォム博士の仕事ぶりにしだいに信用をおくようになるのであった。計画の本格化に合わせ、正式な認可をもらうため、将軍は首都へと上京する。

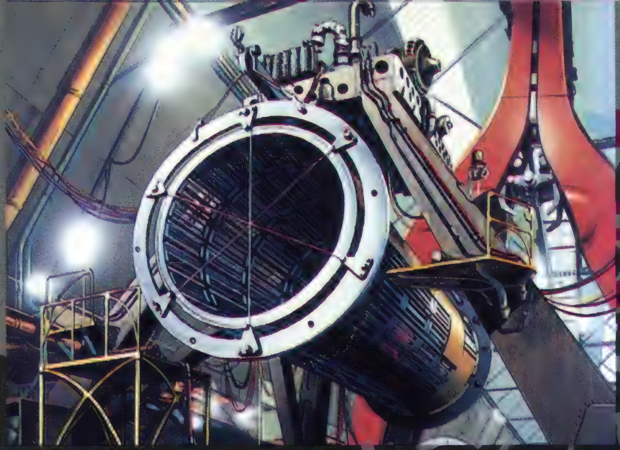
そんな忙しい最中においても、シロツグは合間を見てリイクニの家へとかよっていた。しかし、親しくはなっていっても、宗教の教えを頑くなに守ろうとするリイクニに、しだいに気持ちが、すれちがう感じをおぼえるようになっていた。

シロツグの訓練も本格化され、本物そっくりのシュミレーターも導入された。しかし、それらの費用が正式な予算ではなく、不正な取引によるものだと知ったシロツグは、首都での宇宙計画発表にもいまひとつすなおに喜べなかった。

シュミレーターによる訓練の最中、リイクニから助けを求める電話が！　シロツグは急いでかけつけるが、そこには借金のかたとして電力会社に奪われ、残骸と化した家の前に立ちつくすリイクニとマナの姿があった。シロツグは電力会社を訴えるように説得するが、リイクニは人と争いたくはないといって、教会の世話になると言うのだった。そんなリイクニに対してシロツグはなすすべを持たなかった。

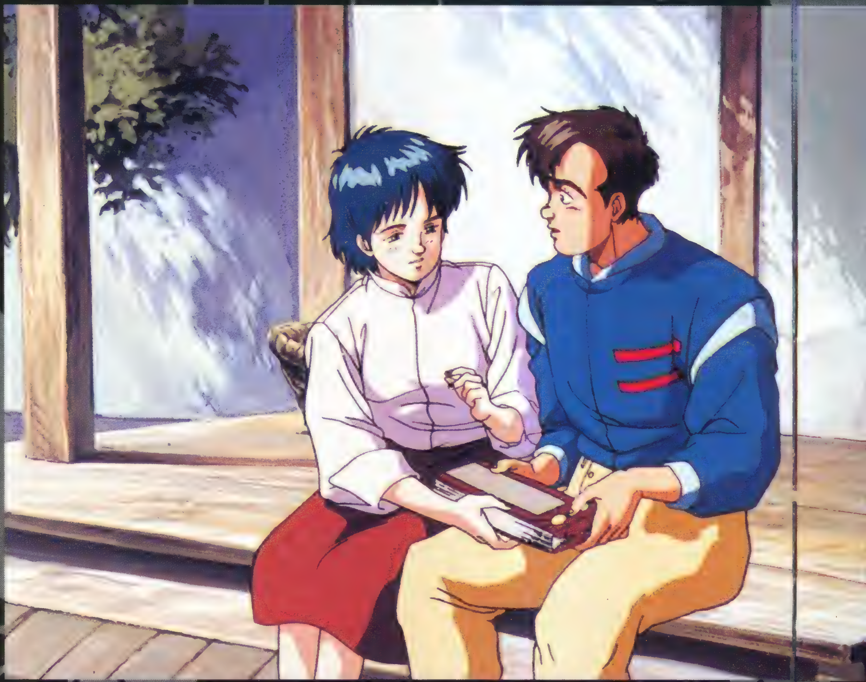
ロケットの組立ても最終段階に近づきつつあるとき、シロツグはグノォム博士と共にエンジンテストに立ち会っていた。自分の作り上げたエンジンの調子を見守るグノォム博士との会話の最中、突然エンジンが咳こみはじめた。ハッとしたシロツグが隣りを見ると、すでにグノォムは逃げ出していた。シロツグがふせるやいなや、エンジンは大爆発をおこしたのだった。

数日後、奇跡的に軽症ですんだシロツグのもとに、グノォムが死んだという知らせが入る。シロツグは信じられない気持であった。























TALK

山賀博之

原案
脚本
監督





人間を描く



この作品は"オネアミス"という架空の世界を舞台にしていますが、それは現実を写す鏡として異世界を使っているわけで、つまりそこで暮らしている人達はあくまで現実なんです。まったくの絵空事の異世界では意味が無い。では何故わざわざ異世界にしたのかというと、現実を舞台にするとその現実さを表現する方に力をとられてしまう。そうではなく、人間を描きたかったんです。

オネアミスという街のイメージは、新潟をベースにして考えてあるんです。実感的な広さとしてとらえた場合に、ひとりの人間が街として把握できるのは人口50万から100万ぐらいの規模の地方都市なんです。東京の練馬や武蔵野では地方都市ではないんです。新宿や銀座、浅草の全ての要素があって、それ全部が小さい街なんです。ビル街からタクシーに乗って10分くらい走ると田園風景になる、というそういうイメージを出したかった。

いずれにしろ舞台は異世界なので、何か現実感を出すものが必要だったんです。そのひとつが影のつけ方です。コントラストをはっきり出して、暗い部分はつぶれてしまってもいいし明るい部分はとんでしまってもいいや、と。もうひとつ空の描き方ですね。雲の質感を出そうと思ったんです。遠くから見た時は形が整っているけれど、近づくと霧状の水蒸気になっている。地上からの高さが表現できれば、宇宙に上がった時に更にその高さが出ると思ったんです。

描く為に異世界を舞台にした

STORY

２人は必死になって逃げ、なんとかまいたものと思い、二手にわかれる。だが、リイクニの所へでもかくれようと、駅に向ったシロツグに、再び暗殺者がせまる。人気のない駅の構内を追われるシロツグは、ついに反撃をこころみ、成功する。だが、そこで彼は初めて人を殺してしまうのだった……。

さまざまな出来事に、自分の道を見失いつつあったシロツグに、将軍は語る。生きてゆく上で大切なことは、正義や悪などといったことでなく、自分の立場を見つけて、そこでなにをすべきかということを考え、行うことであると。シロツグは、もう一度打ち上げ計画に真剣に取り組むことを決意する。

いよいよシロツグも打ち上げ場に向かう日が近づいてきた。最後のわかれをつげるべく、シロツグはリイクニをたずねる。だが、マナとは心を通じることができたが、リイクニとは、たいした言葉もかわせずに別れてしまうのだった。

打ち上げ場では、すでに準備は整い、発射の日まで訓練がくり返されていた。そして打ち上げ前日、将軍は打ち上げ時間を突然くり上げるとつげる。共和国軍を引きよせるために、スパイがわざと発射時間をもらしており、ことによると発射が不可能になるおそれがあるというのだ。だが、発射準備が整ったとき、すでに共和国軍が国境を突破して、守備隊との交戦が開始されていた。

全員退避を勧告され、将軍は発射をあきらめようとする。だが、決意の固いシロツグの説得に、作業を再開するのだった。

周囲では、上空そして地上でもロケットをめぐり激しい戦いが行われていた。発射のカウントダウンが進むなか、共和国軍もしだいにロケットにせまりつつあった。

そして発射の瞬間――すべての時間が凍りつき、轟音と共にロケットは上空へ駆けのぼっていった。戦闘中の両軍も、ロケットのすさまじい噴射をしばしぼんやりとながめていた。

次々とブースターを切り離し、ついにカプセルは軌道に乗ることに成功する。大喜びする宇宙軍のメンバーたち。

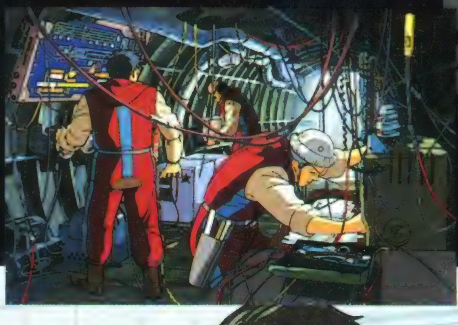
カプセル内のシロツグは、地上の人々に祈りをささげる。そして、宇宙の夜明けは、シロツグに人類の歴史のイメージの奔流を見させるのであった。

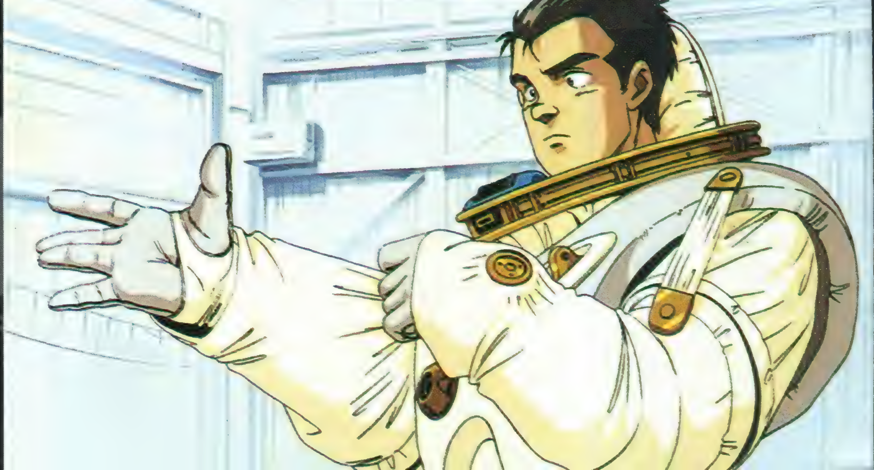


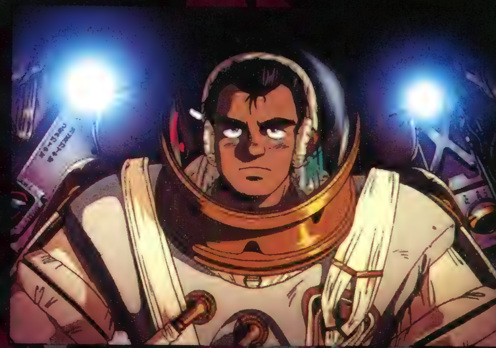

















王立宇宙軍制作日記





この企画が監督・山賀博之の中に芽生えたのは、5年程前、大阪芸術大学在学中のことであった。

そして、1年ほど後に「DAICON Ⅳオープニングアニメ」を作り上げた、岡田プロデューサーと山賀は、このために集った有能なメンバーをこのまま解散してしまうのはおしいと考え、次回作をアマチュアではなく商業ベースに乗った企画として考え始めたのである。そのときに、以前頭をかすめた異世界を舞台にした物語、という発想が取り上げられ、さらに2人の間で煮つめられていった。

また、さらに1年後。企画は練り上がり、その内容のポイントは、完成品とほぼたがわぬところまで出来上っていた。こうしてこの企画の売り込みが始まった。この辺のくわしい経過はかなり長いので省くが、この企画は(株)バンダイに取り上げられた。

しかし、まだ仮採用という形であったので、まずはパイロットフィルムを製作するということで、作業が開始された。このときに、製作母体となる(株)GAINAXが設立され、高田馬場に仮スタジオが開かれた。この約5分ほどのパイロットフィルムは84年の末に製作を始め、85年の春に完成した。

この内容に満足したバンダイは正式に企画にGOサインを出した。そしてその年の夏にメインスタッフは、アメリカへ取材旅行にむかい、幸いにもスペースシャトルの打ち上げを見学することが出来た。その後、年内いっぱいは異世界を創造するための設定作りと、秋には脚本も完成し、画面作りのための絵コンテ作業が始まった。

そして86年になり、原画作業が開始される。また人員の拡大にあわせて、スタジオも吉祥寺にある約90坪の広いスペースをもつ場所へと移動した。同時進行で動画、そして仕上へと作業もふえ出し、6月には撮影も加わり作業もスパートにかかってきた。

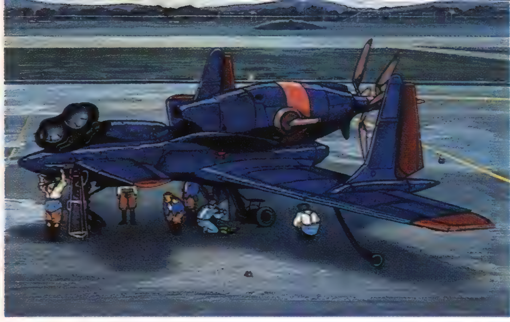
長いようで短かかった1年がすぎ、86年の年末に映像が完成。同じく秋からスタートした音楽作りも、ほぼ同時に終了した。アフレコは11月末、高田馬場のアバコスタジオで終えており、いよいよダビングである。

1月末に、一部のリテークを残しながらも0号試写が行われた。そして2月4日、リテークもほぼ終了し、初号試写。

そして、年明けから製作を始めた英語版も完成し、2月19日には日本映画史上初の海外プレミア試写が行われ大成功をおさめた。

こうして、いよいよ3月、日本の劇場において「オネアミスの翼」はロードショーされる。



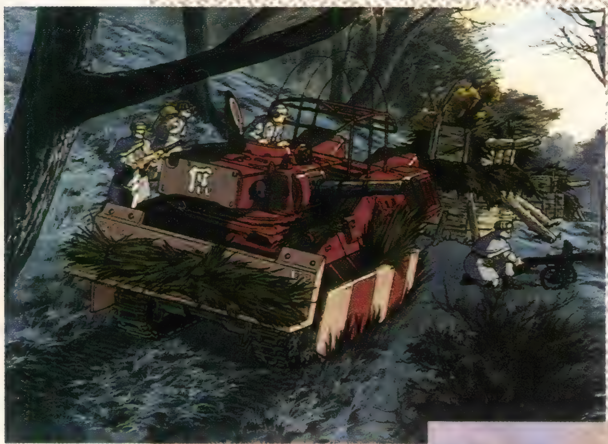


王国レシプロ戦闘機

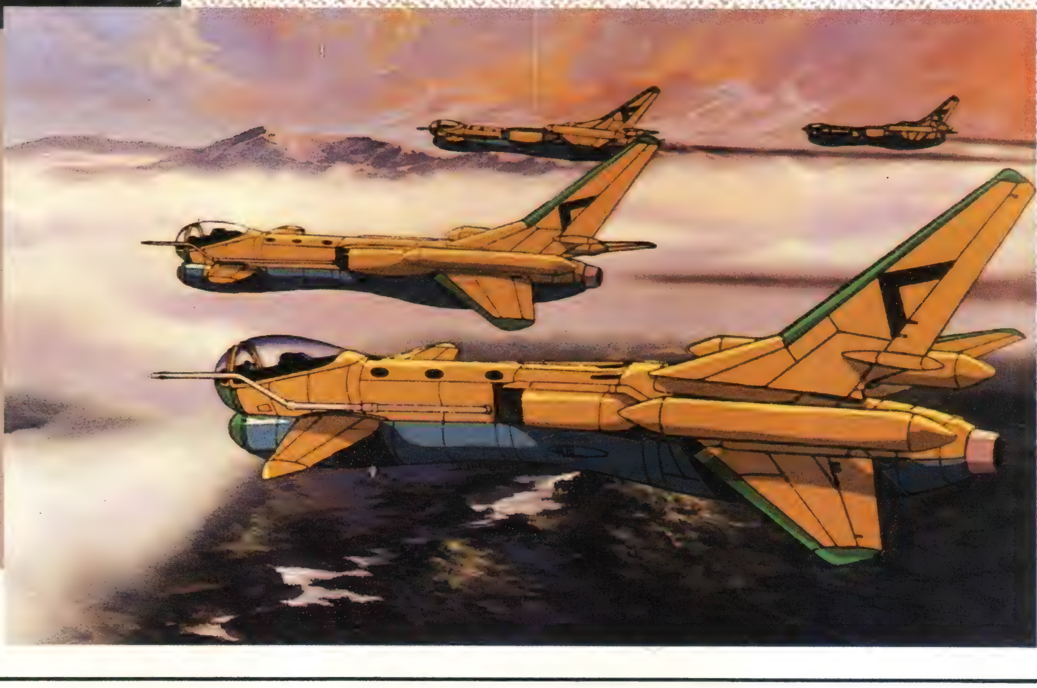








王国戦車



共和国ジェット戦闘機



上陸用ホバークラフト







装甲車



バズーカ砲

STAFF PROFILE

原案・脚本・監督
山賀 博之



1962年、新潟生まれ。大阪芸術大学中退。
高校時代に映画評論家の淀川長治氏の文の中で「映画監督になる方法があるとすれば、まず1本の作品を十回以上見ることです」といったようなことを読んで知り、それ以来、自分は映画監督であると自称し、映画監督としての勉強を重ね、チャンスを狙っていたという。
その手始めとして参加した「大阪SFコンベンション」(DAICON)でオープニングアニメの演出を担当し、2本の作品を作り上げた。これが、「DAICONⅢ」「DAICONⅣ」オープニングアニメで、その完成度の高さは、ファンはもちろん、プロの間でも話題を呼んだ。
今回、この作品では原案・脚本・監督と三役をこなし、その実力が本物であったことを認識させてくれた。いまだ、弱冠24歳であり、今後が大いに期待できる大型新人といえよう。

企画・プロデュース
岡田 斗司夫



1958年生まれ。大阪市出身。大阪電気大学中退。
82年に、大阪初のSFショップ「ゼネラルプロダクツ」を設立。「大阪SFコンベンション」のイベントプロデューサーなども手がけ、アマチュアのイベントにおいて3000名近い参加者を集めるといったみごとな手腕を見せている。このときに知り合ったメンバーと共に、「DAICON FILM」を設立。「愛国戦隊大日本」「快傑の一てんき」などの脚本、「DAICONⅢ、Ⅳオープニングアニメ」のプロデューサー等を務めている。
本作品では企画・プロデューサーを務め、若手、ベテランを見事につかいこなし、アニメ史上に残る作品を作り上げた。

作画監督・スペシャル・エフェクト・アーチスト
庵野 秀明



1960年生まれ。山口県出身。大阪芸術大学中退。
『超時空要塞マクロス』(84)での精密極まるメカニック描写、そして『風の谷のナウシカ』(85)での巨神兵復活のダイナミックなシーン。みな、彼の手によるものである。本作品でも、スペシャル・エフェクト・アーチストと称して、クライマックスの一大攻防戦、そしてロケットの打ち上げといった迫力あるシーンのすべてを手がけている。いわば、実写でいう特撮監督のような作業を担当した。本作品ではその彼のテクニックの全てが駆使されており、その迫力は実写とくらべても、なんら遜色のないものである。

作画監督
森山 雄治



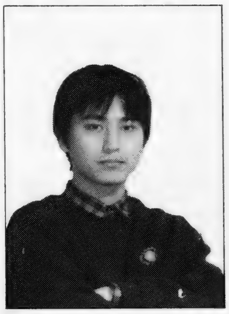
1959年生まれ。東京出身。
昨今のアニメ界を席捲する"美少女ブーム"を生み出したメンバーの一人。「うる星やつら」のラムちゃん、「めぞん一刻」の響子さん等々……彼が描いた美少女キャラクターたちは、他のアニメーターにはまねのできない、実に魅力的なものであり、多くのアニメファンから絶大な人気を得ている。
86年の「プロジェクトA子」ではキャラクターデザインと作画監督を務め、個性的なキャラクターとダイナミックなアクションで、劇場につめかけた若者を熱狂させた。

美術監督
小倉 宏昌



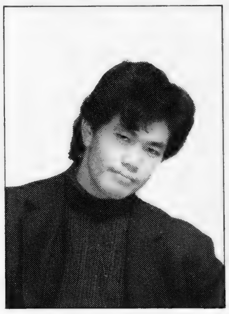
1954年生まれ。東京山身。
22才のときに、アニメーションの美術スタジオとして有名な小林プロダクションに入社。美術への道を歩み始める。「家なき子」「宝島」などのTVアニメ、「ルパン三世カリオストロの城」等に参加し、その後フリーに。
仲間と共に「スタジオ風雅」を設立し、「銀河漂流バイファム」「キャッツ・アイ」などの人気TVシリーズを手がけてきた。
今回、劇場用作品の美術監督は初めてながらも、いままでに蓄積してきた技術のすべてをつくして、アニメーションの美術に新たな世界を作り出した。

キャラクターデザイン・作画監督
貞本 義行



1962年生まれ。山口県出身。東京造形大学卒。
監督と同じく、今回初めて、キャラクターデザインと作画監督を務める期待の新星。アニメーターとしては「超時空要塞マクロス」(84)「天使のたまご」(86)などに原画として参加している程度で、まだキャリアは短かい方である。しかし、学生時代に漫画家としてデビューし、現在のバイク漫画ブームの先がけ的存在である「18R(ヘアピン)の鷹」などを描いており、本作品でもいままでのアニメとは違った新鮮味あふれるキャラクターを作り出すなど、時代を先取りする目を持った作家であり、今回の作品でその実力を知らしめたといえよう。

作画監督
飯田 史雄



1962年生まれ。東京出身。
現在、わが国で作られている、アメリカなどとの海外合作アニメーションの分野で大きな活躍をしている若手。
なかでも、全米ネットワークで放映され、平均24%という高視聴率をあげた「Thunder Cats」では、キャラクターデザイン・作画監修という形で参加している。
オリジナルのキャラクター&ストーリーで、国際市場に通用する作品を作り上げるノウハウは、この作品においても注ぎ込まれている。
日本で手がけた作品としては、「メガゾーン23」シリーズなどがある。

音楽監督
坂本 龍一



常にミュージック・シーンの先端を極めるスーパーアーチスト。元YMOのメンバーとして知られ、特に日本国内はもとより、海外でのさかんな活動でその名を馳せている。グループ散開後も、精力的にソロ活動を続けており、「音楽図鑑」「未来派野郎」などのアルバムで、ソロアーチストとしての地位を不動のものにした。
また「戦場のメリークリスマス」、そして現在製作中の「ラスト・エンペラー」で俳優としても活躍しており、まさにマルチメディアの先駆者といえる。
映画音楽はこの作品が3本目だが、新たな異世界を創造するというコンセプトに大いに賛同し、上野耕治(元ゲルニカ)、野見祐二(おしゃれテレビ)、窪田晴男(パール兄弟)といったメンバーと共に、完璧な異世界の音楽を作り上げた。これは単なるBGMを超えて、音が演出する刺激的なサウンドとなっている。

STAFF & CAST

メインスタッフ

エグゼクティブ・プロデューサー…山科　誠
企画……………………岡田斗司夫／渡辺　繁
プロデューサー…………末吉博彦／井上博明
原案／脚本…………………………山賀博之
キャラクターデザイン／作画監督…貞本義行
作画監督……庵野秀明／飯田史雄／森山雄治
美術監督……………………………小倉宏昌
撮影監督……………………………諫川　弘
撮影スーパーバイザー………………八巻　磐
編集…………………………………尾形治敏
音響監督……………………………田代敦巳
効果…………………………………柏原　満
録音…………………………………林　昌平
音楽監督……………………………坂本龍一
監督…………………………………山賀博之

キャスト

シロツグ……………………………森本レオ
リイクニ……………………………弥生みつき
マナ…………………………………村田　彩
マティ………………………………曽我部和恭
カロック……………………………平野正人
ドムロット…………………………鈴置洋孝
ダリガン……………………………伊沢　弘
チャリチャンミ……………………戸谷公次
ネッカラウト………………………安原義人
ヤナラン……………………………島田　敏
マジャホ……………………………安西正弘
将軍…………………………………内田　稔
指導官………………………………飯塚昭三
グノォム博士………………………大塚周夫
デクロ………………………………及川ヒロオ
ロンタ………………………………槐　柳二
貴族A………………………………納谷悟朗
貴族B………………………………寺島幹夫
貴族C………………………………梶　哲也
読経老婆……………………………牧野和子
酒場の男……………………………後藤　敦
酒場の女……………………………勝生真沙子
娼婦…………………………………小林優子
記録映画ナレーション……………瀬能礼子
空軍パイロット……………………沢りつお
管制官………………………………石井隆夫
空軍士官A…………………………村越伊知郎
空軍士官B…………………………山下啓介
空軍士官C…………………………林　一夫
スピーカーの声……………………八代　駿
デンタ………………………………山崎哲也
他………………………テアトル・エコー
ネレッドン……………ウィリー・ドーシー
作戦室アナウンサー……スティーブ・フェルパー
交信者…………………ドン・ウィットヤー
書記官……………フィザンキー・ベロット
給油交信者…………ウィリアム・ロバーツ
司令官…………ジェリー・マッケーリック
共和国アナウンサー……ドーラ・コートレル
漫才師A…アントン・ウィッキー(特別出演)
漫才師B…オースマン・サンコン(特別出演)
アナウンサー………………………徳光和夫
（日本テレビ／特別出演）
トネス殿下…………………………熊倉一雄

スタッフ

助監督………赤井孝美／樋口真嗣／増尾昭一
脚本協力……………………………大野木寛
プロダクション・デザイン &
レイアウト・デザイン…渡部　隆／貞本義行
前田真宏／滝沢洋一／庵野秀明／稲葉治虎
卜部　剛／高野正之／田中精美／園田健一
夢野レイ／藤原カムイ／飯田史雄／金井次郎
柳沼和良／赤井孝美／樋口真嗣／田中恵美
美術ボード…小倉宏昌／佐々木洋／菊池正典
モデル制作…石田兵衛／原口高陽／二宮茂樹
杉田　晋／岸田晃宣／田村紀夫
アメリカ取材協力……………日本テレワーク
ＵＳＡエアリアル／ＮＡＳＡ
設定スーパーバイザー…野田昌宏／江藤　厳
色彩デザイン……………若井喜治／赤井孝美
オープニング・エンディングイラストレーション……………………………大西信行
演出助手……………………………木村　哲
制作担当……………………………土屋祐一
制作進行…………………村浜章司／河野浩二
大畑清隆／熱海正志
制作助手…………………田村紀雄／井出裕貴
制作宣伝……………………………辻　壮一
制作事務…………………岩崎善勝／菅　浩江
プロダクション・マネージャー……岡田和美
原画…………摩 砂 雪／川名久美子／井上敦子
前田真宏／井上俊之／金井次郎／高坂希太郎
窪岡俊之／津久井明子／中野彰子／森川定美
河口俊夫／近藤勝也／遠藤正明／所　智一
柳沼和良／二木真希子／及川博史／稲野義信
小原秀一／門上洋子／山内則康／北島信幸
結城信輝／新谷禎一／林　千博／大貫健一
大塚伸治／桜井邦彦／高野高夫／須貝美佳
岡村　豊／平賀道康／立木康子／竹内一義
吉本きんじ／山本　敏／大滝友子／板野一郎
江川達也／三坂　徹／市川吉幸／本谷利明
スペシャルエフェクトアーチスト…庵野秀明
３Ｄコンピューターグラフィックスオペレーター……………………………田中精美
３Ｄコンピューターグラフィックプログラム協力…………木尾保男／下村　誠／原　秀一
株式会社アスキー
プロシューマー株式会社
原画協力…スタジオジュニオ／スタジオライブ／マッドハウス／アートランド／ＯＨプロ
動画…………村田康人／中山岳洋／西本誠司
松原秀典／武井芳明／浦上　進／島村秀一
卜部　剛／高野正之／八重樫昌宏／塚田　明
高橋英樹／児玉和子／奈良美津子／平田智浩
中谷真理／日暮恭子／関　明美／山室直儀
江原　仁／鵜飼美樹／田中立子／大谷美樹
木口寿恵子／相田　徹／永野洋義／後藤由美
釜田万里子／吉川真奈美／北畑れおな／海老原佳代子
今井雪子／堤　章江／蓮見美香／鎌田春生
黒田郁夫／手島晶子／椎名律子／大谷久美子
長井和久／泉　　都／大江真徳／山田みどり
入江　篤／成田達司／葛西　智／河内由美
松尾佳明／山田隆弥／吉田光昭／斉藤利子
岡部知美／吉田佳子／本間　正／斉藤一枝
松野裕治／浅見英子／小島敏夫／堅山慎一
大宮ゆり子／山口昌恭／近藤健一／手島勇人
宮田知子／中島広人／津地邦明／吉田　馨
堀内博之／長野順一／渡辺恵子／佐久間敬子
村上　康／前川博信／佐藤利恵子／結城延子
宮田忠明／楠田博樹／遠藤こうじ／中川早苗
安西澄子／新井正行／浅田一則／伊藤和智
今井　聡／今津博文／鎌田公夫／影山哲次
五十嵐鈴子／本田美代／村田俊治／大森敦子
杉浦幸次／南黒沢由美／岸澤龍作／酒井龍生
柴田晃宏／高橋香具美／田頭万紀江／滝口　健
田中　実／田淵雅史／三木貴文／村田峰征
山口恭史
動画チェック……………鈴木篤哉／清積紀文
佐藤裕二／米田　宏／古川佳正／尾沢直志
ガイナックス大阪スタジオマネージャー……
……………………三輪基博／田中苗雄／神田善美
玉谷　純／神村典子／高砂雅代
動画協力…進藤プロ／スタジオタブ／ネットワーク／玉沢動画舎／スタジオファンタジア／動画工房／スタジオぎゃろっぷ／スタジオ九魔／ネオ・ビジュアル・コーポレーション／タイガープロダクション／スタジオポッケ／マジックバス／ウイスキースタジオ／マッドハウス／ネクストワン／メルヘン社／スタジオルック／ハウリング／ライフワーク／アートランド／トゥエンティワン／AIC／虫プロダクション／グループどんぐり／カナメプロダクション
色指定…………………松元恵美子／小林美代子
仕上検査……鎌田千賀子／高野昌夫／松田久子
田丸雅彦／内田　聡／山田雅與
トレス……………………芝山尚子／金井真弓
藤沢光男／小林あや子
仕上げ……………オンリー・フォア・ライフ
大武恭子／高橋和代／相沢温子／尾崎春子
大久保徳美／田村明美／若林洋子／成沢美和子
加藤明美／大津留汐子
ゼロファックス…………海宝英樹／佐藤孝二
粕谷精作／武笠　孝
特殊効果……広野　覚／谷藤薫児／金井信之
仕上げ協力…プロダクションアクト／スズキ動画企画／李プロダクション／スタジオシティ
美術…………佐々木洋／菊池正典／伊那淳子
武重洋二／串田達也／川上　太／広瀬愛一郎
大田清美／佐藤美々子／河野尋美／佐藤博明
本田　修／長縄恭子／地蔵本拓嗣／須藤栄子
石津節子
美術特殊効果………………………谷口久美子
ハーモニー処理……………………高屋法子
美術協力…スタジオ風雅／現代制作集団／石垣プロ
撮影…………藤田正明／久保田典秀／山口利明
鈴木秀男／後藤　然／澤田典彦／鈴木一則
山本　隆／沖野雅英／渡辺秀俊／小澤次雄
吉田光伸／津田輝王／細田恒生／金沢章男
藤井秀生／熊谷孝広／関戸宏樹／白神孝始
小林武男／宮島幸雄
撮影協力…虫プロダクション／ティニシムラギャロップ／トランスアーツ／高橋プロダクション／ＡＣＣ谷原スタジオ／珊瑚礁／三晃プロダクション
スペシャルエフェクトアニメーション撮影…
………………アニメーションスタッフルーム
スペシャルエフェクトスチール……中島秋則
音楽…………………………………坂本龍一
上野耕路／野見祐二／窪田晴男
録音……………………田中信一／中越道夫
制作……………………藤井丈司（ＴＯＰ）
篠崎恵子（ミディ）
山添昭彦（ヨロシタミュージック）
スタジオ………ＣＭＳスタジオ／音響ハウス
音楽エグゼクティブ・プロデューサー………
…………大蔵　博（ヨロシタミュージック）
キャスティング協力……田寺尚和／村井亨子
効果協力……………スワラプロダクション
録音助手………………阿波良和／上村利秋
音響助手……………………………吉野勝久
スタジオ……………………………………
…………アバコ・クリエイティブ・スタジオ
東宝録音センター
技術協力…………極東コンチネンタル(株)
森　幹生
音響協力……………………グループタック
現像…………………………………東京現像所
オプチカル…………………………………
…………青山　学／岸本義幸（東京現像所）
フイルム………コダックイーストマンカラー
編集助手……………………………伊藤喜子
タイトル題字………………………山本麻佐子
タイトル……………………牧プロダクション
シナリオ印刷………………もちづきプリント
スチール……………………………中島秋則
宣伝用仕上げ………………………徳田ムツミ
制作協力…………………武田康広／永瀬　唯
高橋信之／広瀬和好
ハイテック・ラボ・ジャパン／スタジオアッシュ／スタジオハード／プロトタイプ
協力(50音順)……全日空／株式会社ネットワーク／株式会社ムービック／森永製菓株式会社
連載協力…………秋田書店「月刊プリンセス」
展開協力（50音順）／朝日ソノラマ「小説版オネアミスの翼」／アニメック「月刊アニメック」／学研「月刊アニメディア」／角川書店「月刊ニュータイプ」／小学館「オネアミスの翼・ムック」／大日本絵画「月刊モデルグラフィックス」／徳間書店「月刊アニメージュ」／バンダイ「Ｂ－ＣＬＵＢ」「模型情報」／みのり書房「月刊ＯＵＴ」
オリジナル・サウンド・トラック……………
…「オネアミスの翼～王立宇宙軍～」
音楽　坂本龍一
上野耕路
野見祐二
窪田晴男
MIDI　INC.
イメージソング………………………………
……「オネアミスの翼～Remember Me Again～」
歌　統乃さゆみ
作詞　森生紗都子
作曲　長門大幸
編曲　長岡長次郎
CBS／SONY　INC.
オネアミスの翼　制作委員会…………………
…青山紀子／安蒜利明／石野雄士／和泉富子
伊藤邦雄／江口政道／遠藤邦昭／大森誠之
加藤　智／川口克己／坂部和男／笹生秀雄
佐々木貴英／笹沼祐之／柴田裕司／高尾香恵子
高橋秀明／武石留美／武田俊和／竹谷健二
中村千尋／長友一郎／灘　俊宏／西　広泰
橋本真司／浜田雄策／東　　聡／福本博之
古田真美／星　明信／益森　清／宮河恭夫
森島隆之／吉田貴之／桜沢　猛／鵜之沢伸
浅賀孝郎／高田修治／土屋新太郎／末吉博彦
渡辺　繁／杉田　敦／佐々野洋子
企画協力…………ＤＡＩＣＯＮ　ＦＩＬＭ
ＧＥＮＥＲＡＬ　ＰＲＯＤＵＣＴＳ
制作……………………………ＧＡＩＮＡＸ
製作……………………………ＢＡＮＤＡＩ



昭和62年 3月20日印刷
昭和62年 3月21日発行
発 行 所 東京都千代田区有楽町1―2―1 東宝 出版・商品販促室
発 行 者 東京都千代田区有楽町1―2―1 大 橋 雄 吉
発行権者 東京都中央区銀座2―6―4 プレイガイドビル内 東宝東和株式会社
印 刷 所 東京都港区芝2―1―28 成旺印刷株式会社

定価 400円

honnêamise



BANDAI

GAINAX

TOWA 東宝東和株式会社

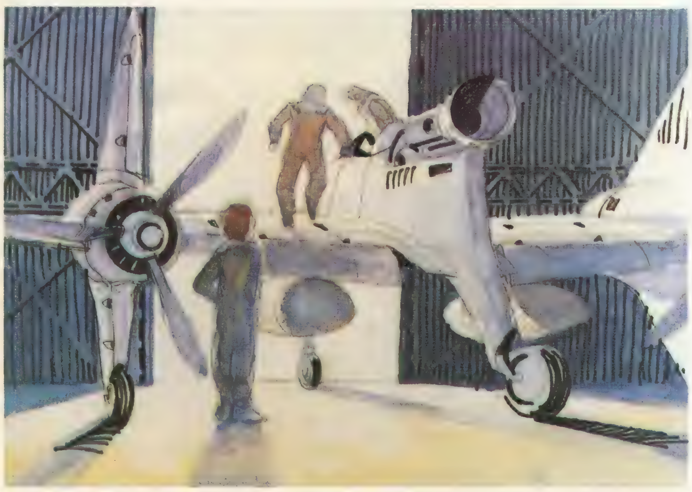
東宝

honêamise close-up report by Yasuhiro

武田康廣の『オネアミスの翼～王立宇宙軍』がわかる話

航空機に関しても様々なイメージボードが描かれた。
いずれも初期のイメージボードより。





英雄の条件

「つまり、早い話があいつは本当のバカだってことだ」席につくなり今年20才になるネッカラウト少佐はそう言った。

「そんなこと言ったら、ロケットを飛ばそうなんて考えてる俺達ぜんぶバカって事になるじゃないか」チャリチャンミ少佐が応えた。やはり20才だ。

「そりゃあそうだぜ。でもよ、なにも本気で飛ばなくたっていいじゃないか。なっ、そうだろ」

「さあ、俺には分からん」やはり20才のヤナラン少佐が、メニューを見ながら答えた。

ここは、宇宙軍本部に程近いレストランだ。もうじき人類初の有人ロケットを打ち上げることになる宇宙軍のスタッフと話をする機会ができた。

そこで私は、人類史上初の宇宙パイロットになるシロツグ＝ラーダット中佐について聞いてみる事にしたのだ。

「だから、さっきから言ってるように、あいつはただのお調子者なんだよ。

そのバカに、俺達は付き合わされてるんだよ。まったく」とネッカラウト少佐はいう。

人類初の有人ロケットを打ち上げる為のスタッフなのだから、そのことについてもっと熱狂的なのだと考えた。がしかし、これでは全く正反対だ。

「別に、反対しているわけじゃないよ」とチャリチャンミ少佐。

「飛びたいのなら、飛ばしてやればいい。俺はいやだけど。」

「おまけに、忙しくなったおかげで消防団に行けなくなったし」

チャリチャンミ少佐の実家がある村では、月に一回消防団の訓練があるのだ。気晴らしにはピッタリだと言う。

「俺の親父は、そんな危ない仕事はさっさとやめて、故郷に帰ってこいってうるさいんだ」ヤナラン少佐が話した。帰れば、最新型の車を買ってくれる。真剣に考えているという。

ネッカラウト少佐が肩をすくめながらいう。「俺は別に故郷に帰ろうなんて考えちゃあいないね。このままでいいんだよ。なのに、バカ一人のおかげで散々だ」

ネッカラウト少佐の実家は驚いたことに、古典芸能の家元なのだそうである。しかし、少佐自身はそのことに全く興味を持っていないという。

それでは君達にとってシロッグ中佐はどういう人なのかと私は聞いた。

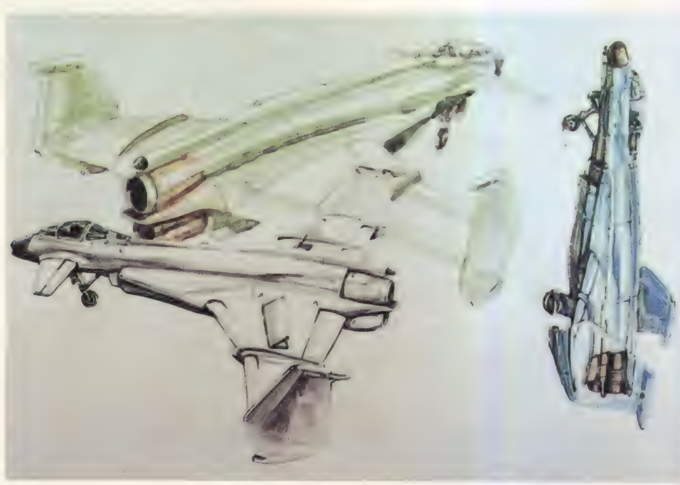
「本当のバカ」とネッカラウト少佐。

「ただの新興宗教かぶれだよ」とチャリチャンミ少佐が嬉しそうにいう。

「うん。女好きなだけだ」ヤナラン少佐が大声で笑いながら叫んだ。

かなり前の休みに、シロツグ中佐が外出から帰ってから急に飛ぶと言い出したと言う。





Takeda

Reserved.



「女だよ、女。よりによって宗教かぶれの女になんかに引っ掛かるんだからな。まったくいい迷惑だ」ネッカラウト少佐はいう。

ここまで話してみて、私は何となくあることに気がついた。それは、いままで彼等が言っていたことが本当に本心から出ているように見えないのだ。

そう、つまり彼等は、実はシロツグ中佐を宇宙へ飛ばす事に夢中になっているように見えるのだ。

考えてみれば、宇宙軍の存在を知ったのは、この有人ロケット計画が発表されてからの人が殆どではないだろうか。それだけ、陽のあたることのなかった彼等が、きっかけはともかく晴舞台に出たわけである。

そして、人類初の宇宙飛行士は彼等の仲間なのである。

「まあ、たしかにカッコイイもんな」と彼等はいった。

「やるからには、成功させなきゃ意味ないからね。それに、俺がいて失敗したなんて言われたくないしな」

「シロツグはどうしょうもないぐらいバカだけど、悪い奴じゃないから」

彼等はそう言いながら、訓練の時間が来たからと言って席をたった。私は、彼等一人一人に礼を言いながら出口まで見送った。ネッカラウト少佐が分れ際にいった。「まあ、見ててくれ。でかい花火を打ち上げて見せるぜ」

王立宇宙軍と私

オネアミス空軍練習機

1:72スケール/作画参考用モデル

二宮茂樹

私が「オネアミスの翼～王立宇宙軍」（当時のタイトルは『王立宇宙軍』であったが）を最初に知ったのは、昨年の4月のことである。友人のR.石田兵衛（仮名）という男が、演出の樋田氏の依頼で作画参考用の模型を作っていた事に端を発する。「異世界のちょっと変わった機体が出るそうなんだが、良かったら作ってみないか？」ともちかけられ、早速パイロットフィルムを見せてもらった。気分が乗ったところで水軍のジェット戦闘機を作ることとなり、MG誌の仕事を休んでまで作ったのだが、その割には以外と時間がかかり、結局、締切りから1ケ月以上も遅れてしまいガイナックスにも御迷惑をおかけした。



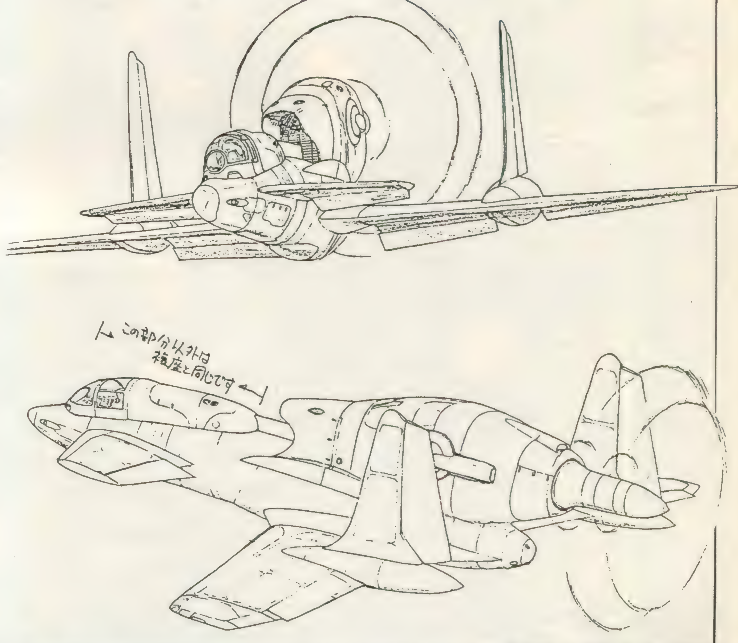
その後も引き続き作りたかったのだが、本職の方が忙しくなってしまい、R.石田氏の共和国軍戦闘機、杉田・原田両氏によるマティのバイク（これは本コラムの12月号分で紹介済）などを横目で見ているだけであった。

そして今回、このコーナーで再び王立宇宙軍にかかわることとなった次第。ま、世の中なんてこんなもんだ。

それで、この機体は空軍の複座型練習機であり、シロツグが前席に乗せてもらい、初めて空を飛ぶシーンに登場するのである。同系の単座型戦闘機はクライマックスで活躍するそうである。

で、モデルについてであるが、これは最初にR.石田氏が作ったものにディティールを加え、塗装したものだが、元来このような形で誌面に登場しようとは、誰もが夢にも思わず、単に作画用であったので、プラ板をバルサでサンドイッチして作られていた。一応、形にしてサフェイサーを吹いてしまえば終わりの、ただそれだけの目的で作られたものを、完全なスケールモデルに仕上げるのは、土台無理というもの。M氏からは、「特撮カットが撮れればいいから…。」と言われていたので、単純にすき間を埋めて塗装しただけである。塗色はフタロシアニンブルーとシャインレッド。一部、本編用と異なるかも知れませんが、まあこんなもんでしょう。

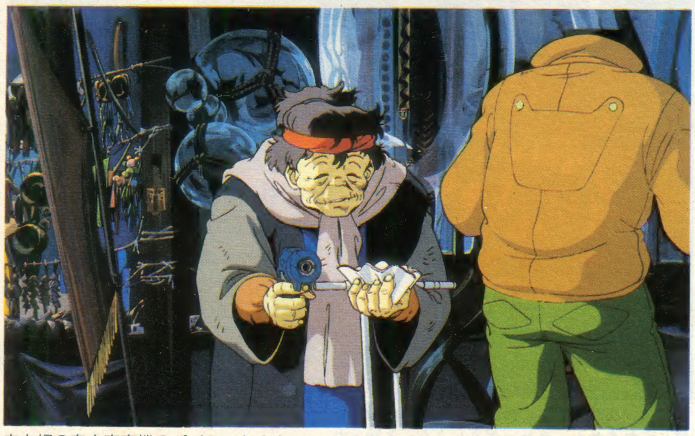
というわけで、映画の方は3月公開とかで、この機体がどのように飛んでくれるのか、早く見てみたいものだ。



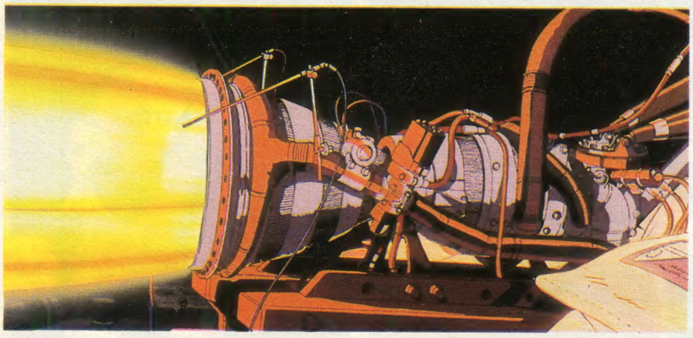
王立空軍戦闘機（単座型）

honêamise close-up report

武田康廣の『オネアミスの翼〜王立宇宙軍』がわかる話



史上初の有人宇宙機のパイロットとなったシロツグを狙う暗殺者。



ロケットエンジン燃焼テスト中…

アニメーションの現場

木枯しの吹くある晩秋の深夜。

一人の男がガイナックス第1スタジオの制作デスクに座っていた。

村浜章司、22歳。

その場所は彼にとって、特別な場所というわけではなかった。しかし、『オネアミスの翼』の5人の制作進行の一人である彼には、この1年間の生活の中心であった場所である。

アニメーターもしくはアニメ関係者でなければ、完成以前のアニメのスタジオを覗くことはほとんどない。一般にアニメーションに関する情報は、たいてい雑誌から得ることになる。制作スタッフにしても、設定や作品のストーリーにしてもそうだ。だから、本当のアニメの制作内容については何も知らない。いや、知らなかったのだ。

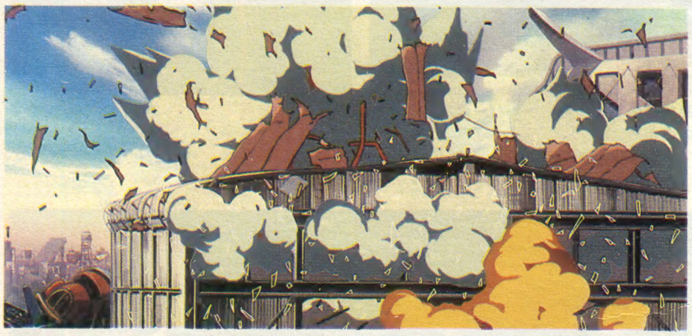
そんなこともあって、ガイナックス第1スタジオで見たことは、非常に興味深いものになった。少なくとも今、このスタジオの中にはニュースになるようなものは何もない。例えば作品内容に関する口論もなければ、スタッフに対する不満の暴発もない。ただひとつの作品の完成に向かって静かに作業が進んでいるだけである。

しかし、そこでいま行なわれていることは、非常に重要なことなのだ。他の多くのスタジオ同様、このガイナックスでも、アニメーターたちが、文化の一端として歴史に残るかもしれない作品を創造している。

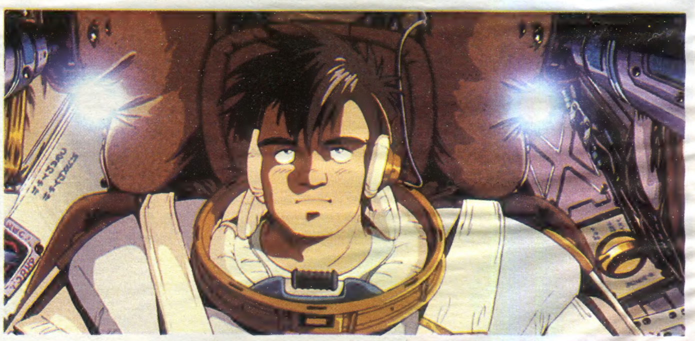
いま私の目前には多くのスタッフたちと共に、村浜章司がいる。アニメ制作スタッフは、一般のサラリーマンとは比べものにならないほど安い給料で働いている。それにもかかわらず、いまアニメーターと打ち合わせしている村浜の姿は、そういったことを感じさせない。この仕事が本当に好きだからこそ、こうしてやっているのだという実感が湧いてくる。

「普通、アニメーターや他の現場の者たちと、制作進行は仲が悪いんですよ。」

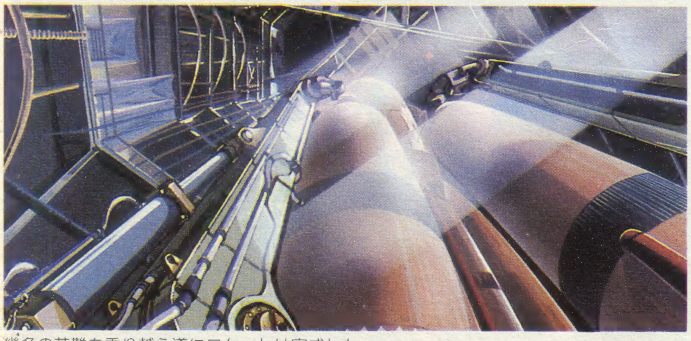
「えっ、一つの作品を一緒に作ってい



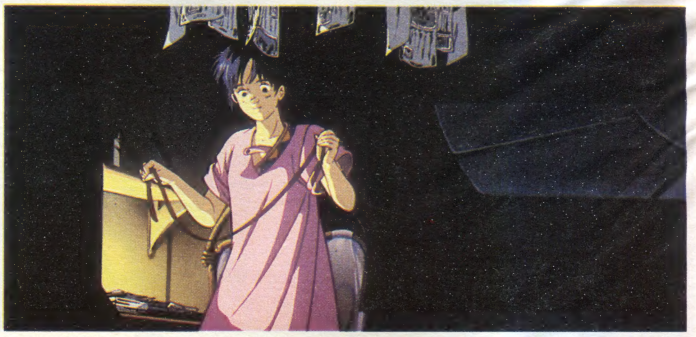
事故が発生！



フライト・シミュレーターで訓練にはげむシロツグ。



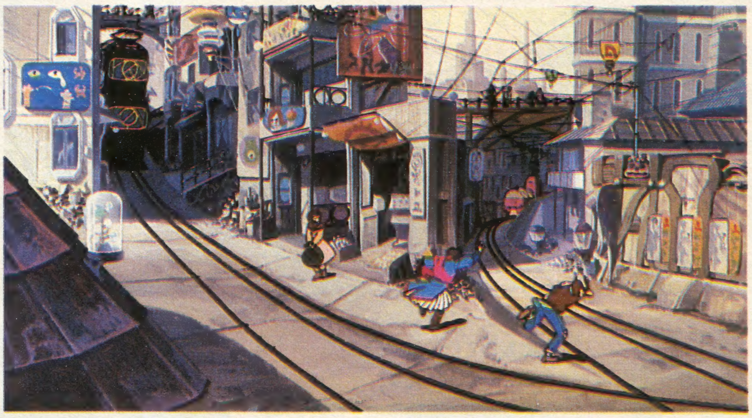
幾多の苦難を乗り越え遂にロケットは完成した。



シロツグが思いを寄せる少女リイクニ。

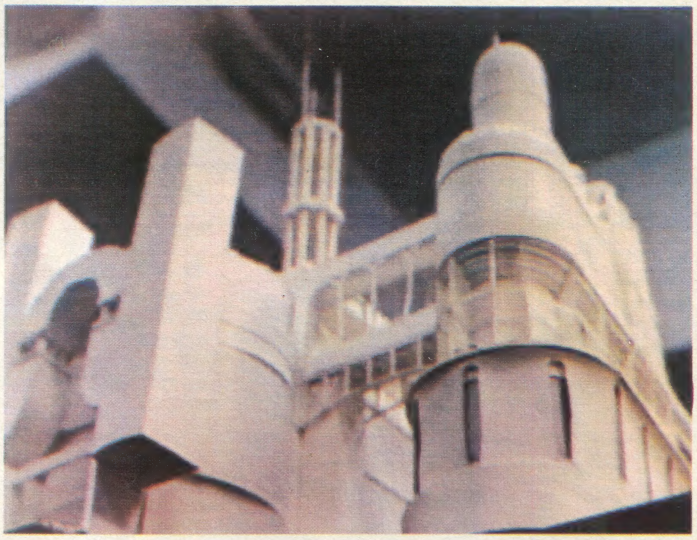
by Yasuhiro Takeda





るのにかい」
「だからこそ、悪くなるんですよ」
　こういった言葉をよく耳にする。つまり、彼が言うのはこうだ。監督を始めとして、原画マン、動画マンやその他多くの人間は、クリエイターなのである。大げさに言えば、何もない真白なコンテ用紙や動画紙のひとつひとつに自分の分身ともいえる創造物を描いているわけである。当然ながら、それは能率的などという言葉とはまったくかけ離れた作業なのだ。
　だが、不幸なことにそんなことは頭から追っ払って、一人一人の尻を蹴っ飛ばしていくのが制作の仕事なのである。だから、そこに軋轢が発生するというわけだ。
「アニメは、アニメーターがいて初めて出来るんだ。極端な言い方をすれば、制作は、誰にでも出来るけど、アニメーターは、この人じゃなければだめだ、ということが多いからね」
　記録用紙を記入しながら、村浜は私にこう言った。
　確かに、彼以外の人間がこの作品の制作を担当できないわけではないだろう。例え、彼が怠けてぞんざいな仕事をしたからといって、誰も気にとめなかったに違いない。数千カットの原・動画をこなさなければならないアニメーターたちにとって、些細なことに違いないのだ。
　しかし、このスタジオに限って言えば、仕事を適当に済まそうなどという考えは、彼の頭をよぎったことさえないようだ。
　さらに不思議だったのは、彼が自らの仕事に持っている誇り、その小さな誇りが他のスタッフに徐々に浸透していったことだ。
　こなさなければならない数多くの仕事と限られた時間。ともすれば総てを投げ出してしまいたくなってしまうだろう。にもかかわらず、制作が誇りを持って働いてくれるおかげで、他のスタッフにも活気が湧き、いい気分でいることができるのだ。
　少なくとも、ガイナックスのスタジオに座っている私にはそう見えた。





宇宙軍施設の模型をビデオカメラで撮影、ビデオプリンターにてプリントアウトし、背景用の資料として使用された。



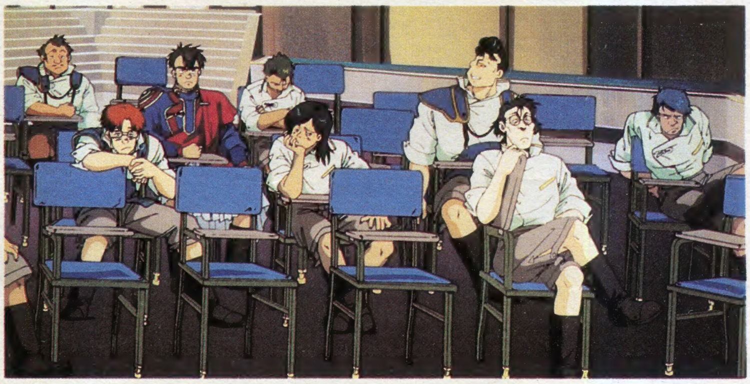
オネアミスの翼 王立宇宙軍

公開直前プレビュー



⬆シロツグ・ラーダットは子供の頃から水軍の戦闘機乗りになるのが夢であった。しかし、そんなものにはなれないことを、成績表が示した。彼は仕方なく宇宙軍に入った。

⬇宇宙軍士官の面々。士官とは名ばかりで、全くC調な野郎たちだ。手前左から、ダリガン、チャリチャンミ、カロック、マジャホ、シロツグ、ネッカラウト、ヤナラン、ドムロットという。



武田康廣のオネアミス感想文



オネアミスの翼が完成した

遂に、「オネアミスの翼」のゼロ号試写を観た。

本来なら、完璧版となる初号を見てからここに書くべきであるのだが、少しでも早くこの気持を伝えたいのだ。

「ブレードランナー」を観た時、その世界観にのめり込んだ。

「ストリートオブファイヤー」の時は、カッコ良さに魅せられた。

「オネアミスの翼」を観た時、僕は本当に、本当に心から感動した。

別にこの作品を友達が作ったからでは無いし、多少なりとも制作に関係しているからでは無い。

この映画を観た後、口がきけなかった。感想を聞かれても、口を開くことさえ苦痛だった。ひとりになりたかった。ひとりで今観た事の余韻に浸りたかった。

★

「面白かったけど、一般の人に分かるのかな。」オリジナルアニメビデオの製作会社にいる友人はそう言った。

「うん、難しい話だね。これを一般の劇場でかけてだいじょうぶかな。」

知り合いのライターは面白かったという言葉の後にこう付け加えた。

★★

画家が絵を書こうとするとき、観る対象を限定するのだろうか。これは一般の人向けの絵では無いというのだろうか。仮にそう言ったとして、果たして誰がそれを納得して観るのだろうか。

★★★

「オネアミスの翼」、この映画の見所を紹介してみようと思うのだが、どういった紹介の仕方がいいだろうか。

なぜなら、「オネアミスの翼」には、映画作品としての見所とアニメーションとしての見所が別々にあると僕は考えている。

そして、このふたつの見所が「オネアミスの翼」という作品を形作っているのだ。

★★★★

主人公シロツグが訓練の為にのる空軍の練習機が飛んでいるシーンは、観ていて気持がいい。濃い青色の機体が雲の上に出た途端、鮮やかな青色になるのだ。

★★★★★

シロツグの声は、森本レオがあてている。

「オネアミスの翼」の作品としての成功のひとつであると思う。

こればかりは観てもらうしかないが。

★★★★★★

クライマックスシーンに共和国軍と王立軍との戦闘がある。大きな見所のひとつである。

とくに戦闘機の墜落シーンが面白い。

しかし、僕が本当に感動したところは、リイクニと一緒に住んでいるマナが笑うシーンなのだ。

★★★★★★★

どういえば、「オネアミスの翼」の面白さと素晴らしさを伝えることが出来るのだろうか。

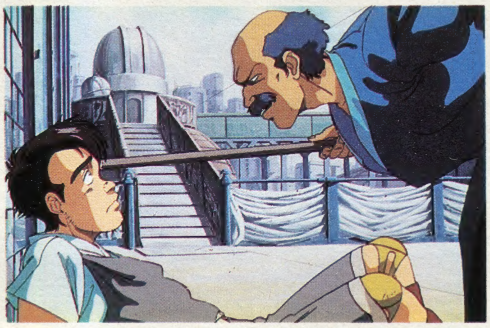
正直に言おう。

僕は、ゼロ号の試写を観ながら、涙が止まらなかった。

大体のストーリーを知り、アフレコ台本を読んでいながらもだ。

これからも、いろいろな関係者が試写を観て、感想や映画評を書くだろう。

ストーリーも徐々に分かってくると思う。しかし、僕の意見はひとつしか無い。これは、名作だと。



⬅宇宙軍士官を鍛え上げるのが生き甲斐の指導官。今日もシロツグを相手に棒を振りかざす。しっかりしろよ、シロツグ。

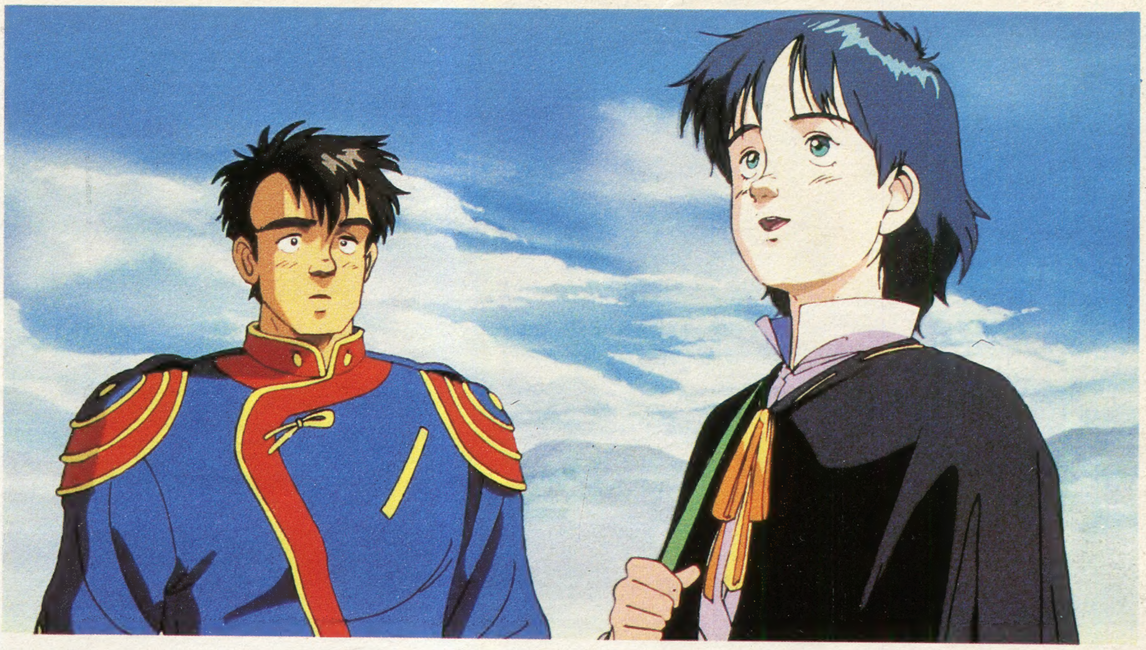


➡宇宙旅行協会のグノォム博士。ヨイヨイばっかりの集まりの中で、一人だけ一本骨の通った人だ。ロケット製造において、エンジン、ノズル関係を担当する。

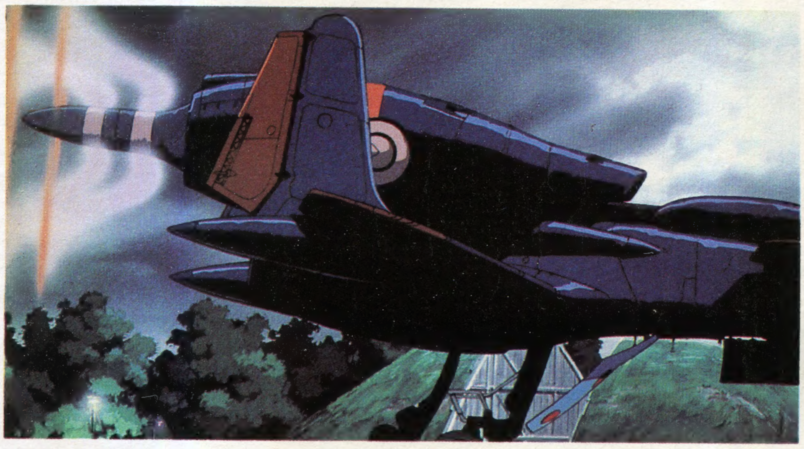


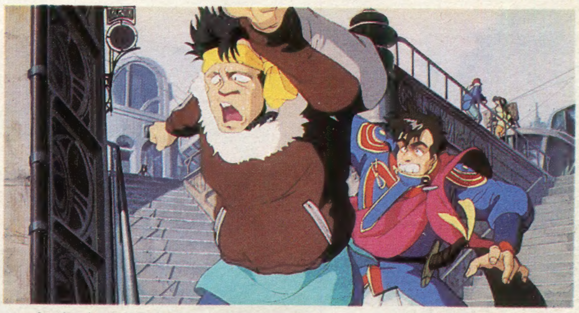
⬅初めて空を飛んだシロツグ。そこは重力の絆を断ち切った素晴らしい世界だった。

➡怠惰な生活を繰り返す中、純真な少女リイクニに出逢い、生きる目標を見つけたシロツグは、宇宙軍将軍の募った世界初の有人宇宙機のパイロットに志願してしまう。

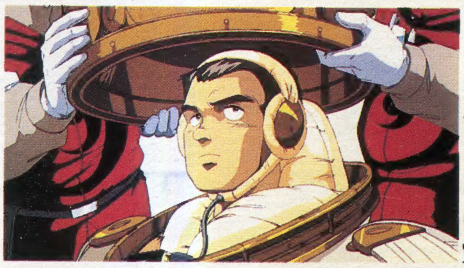


⬇シロツグの訓練が始まった。空軍の練習機を借りての重力訓練も試みられた。



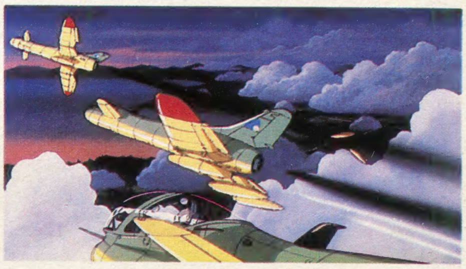


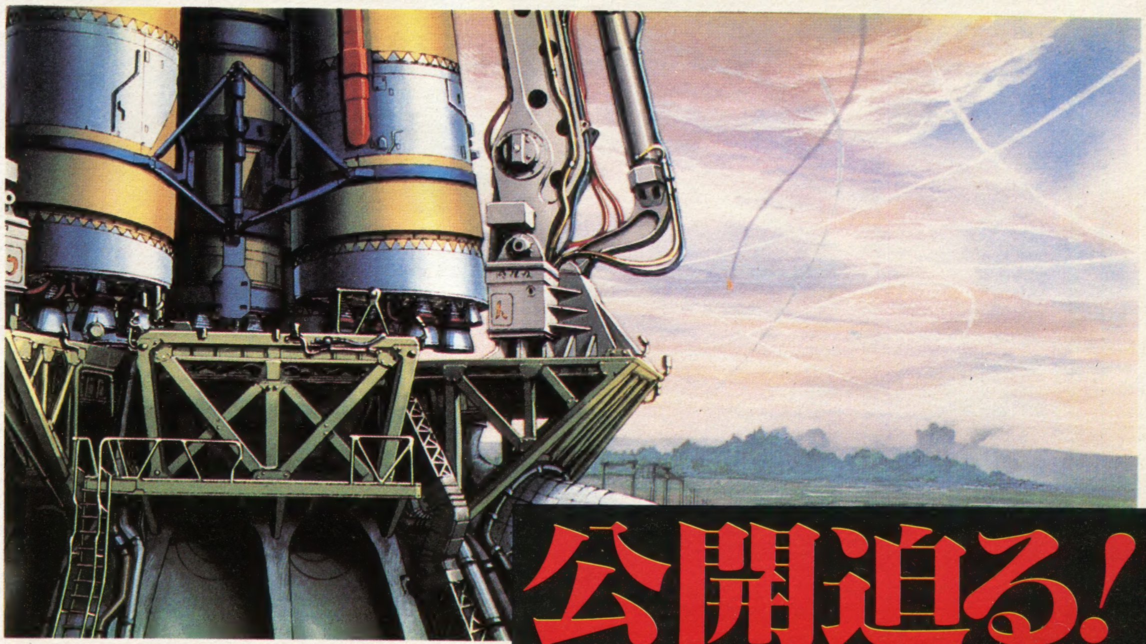
⬆有人宇宙機打ち上げのニュースは全世界に知れ渡り、シロツグは一躍有名人となった。しかし、近隣国の暗殺者に命を狙われるハメに…。手前はシロツグの親友マティ。



⬅遂に打ち上げの日は来た。意を決し、ミッション成功のために命を賭けるシロツグ。

➡打ち上げを阻止するため、王国の発射場に向かう、共和国空軍戦闘機。性能は王国空軍の機体を上まわるという噂だが…。





➡カウントダウンが始まった。しかし、共和国軍は発射場のすぐそこまで迫っていた。打ち上げは成功するのか!? がんばれシロツグ!

公開迫る!